

郡寺の仏像

—茨城・妙法寺伝阿弥陀三尊像・四天王像について—

後藤 道雄

I. はじめに

台渡里廃寺跡観音堂山地区は、7世紀後半に創建された初期寺院と考えられ、わずかではあるが塑像片が出土している。南方地区は9世紀後半に造営された古代寺院と考えられており、押出仏製作の原型鋳型か光背取り付けの化仏製作のための型かと推定される、二重円相光を負い蓮華座上に坐す如来像の雌型が出土している。現時点では両地区ともに金堂安置の仏像についてはそれを明らかにする資料が乏しい。

ところが最近、新治廃寺に近く9世紀後半に建立されたと伝える桜川市妙法寺の諸像調査の結果(註1)、その尊像構成から新治廃寺焼失後、郡寺としての機能を担った可能性を想定することができることになった。台渡里廃寺跡理解の一助として若干の考察を行いたい。

II. 妙法寺伝阿弥陀三尊像の概要

(1) 伝阿弥陀如来坐像(図1, 2)

〔法量〕

像高 138.2 センチメートル(以下、単位省略) 髪際高 120.8

〔形状〕

現状螺髪を表わさない。肉髻珠・白毫相を表わす。耳朵は環状。三道を表わす。覆肩衣、衲衣は左襟縁に初層をかける。

左足外に結跏趺坐する。

〔構造〕

両肩以下側面部を含む頭体幹部をケヤキの一材から造る。木芯は左脇腹辺に籠める。体部背面、後頭部及び像底から体部を内割りし、蓋板を当てる。両脚部は横木一材製、体幹部と両客部材との間に一材(横木)をはさむ。像底には補材をあてる。左右前膊前半に各一材を矧ぐ。手首先は挿込み矧ぎとする。

〔保存状態〕

螺髪亡失。肉髻珠、白毫相(各木製、彩色)、各後補。表面のすべて後補。両脚部と体幹部の間に挟んだ横木一材(マチ材)後補。腹部と両腰回りに当てる当て木数材が後補。像底の蓋板後補。左手後補。右手第二指付け根から、第三指第二関節から先、第四指半ばから先、第五指付け根から先、各後補。背面背板亡失。台座後補。

(2) 伝観音菩薩立像(図3)

〔法量〕

像高 150.5 髪際高 136.9

〔形状〕

垂髻。天冠台(上縁を列弁とするか)を表わす。髪は前面をマハラ彫りとし、後頭部を平彫りとする。白毫相を表わす。耳朵は環状。三道を表わす。条帛・天衣をかける(天衣は腹前を二段にわたる)。裙(折り返し付き)。腰布を着ける。左手は肘をわずかに曲げて、腹前に伸ばし掌を仰ぐ。右手は屈臂し、肩前で拳を握り、直立する。

〔構造〕

頭体幹部はケヤキの一材製だが、背面及び地付きに多くの後補材があり、当初の構造の詳細は不明である。現状から復元的に考えるならば、頭体幹部は左肩先を含み一材製とし、右腕及び左前膊に別材を矧ぎ、頭部及び体部背面から内削りを施し、各蓋板を当てていたと推定される。

〔保存状態〕

主な後補部は以下の通り。右腕の全て、左腕肘先、背面の背板相当部、右体側部下半、地付き部の大小数材の補材、両足先。

（3）伝虚空蔵菩薩立像（図4）

〔法量〕

像高 153.4 髪際高 135.2

〔形状〕

頭部及び体部上半の前面が後補のため、当初の形状は厳密には不明である。ただし、後頭部左方、左腕の肘付近及び下半身左方部が当初なので、本像が袈裟をまとう天部形として造られたことは確実にある。

〔構造〕

頭体幹部は一材製とみられるが、上半身前面から体部右側方にかけて大きく後補されており、当初の構造は不明である。

〔保存状態〕

主な後補部は以下の通り。頭部前面及び右後頭部、上半身前面、右体側部、左肩、左体側部後半部、下半身前面右方、背面地付き部、地付き全体に貼られる薄板。

Ⅱ．制作年代及び尊名

本三尊像の制作年代について考える。伝阿弥陀如来像の見せる、やや頭部を大きめにつくるプロポーションと上半身の重厚な塊量感はずと平安時代も早い時期の作例であることを示している。

体部前面の衲衣の折返し部分の縁をうねうねと翻らせるのは、京都・神護寺薬師如来像や福島・勝常寺薬師如来像など、九世紀像に多く見られる特色である。両肩を含めてケヤキの一材から造り出し背削りする方法も、茨城では八千代町仏性寺如来坐像に見られ、東北を例にすれば、岩手・黒石寺（貞観四年＜862＞銘）や宮城・双林寺の薬師如来像と共通する技法であり、本像の制作年代はこれらの像と近い九世紀末に置くのが妥当と考えられる。

また、伝観音菩薩像は全体にきわめて太造りであり、特にその胸部の塊量感が著しい点に特色がある。一方、伝虚空蔵菩薩像は後補部分が多いため造形から時代を判断することが難しいが、当初部分が残る左耳を見ると、その形状は意外なほど伝観音像に類似している。また、背面の当初部分の造形も襞の起伏をデリケートに表わすなど優れた表現が残っている。中尊と伝観音がともにケヤキ材を用いた重量感のある一木造りであることも考慮すれば、これら三尊は、一具同時の作とはいえないまでも、ともに近い時期に制作されたと見ることに無理はないと思われる。従って、その制作時期は三尊ともに九世紀末を基準として考えてよい。

本尊の制作年代をこのように措定したとき、まず伝阿弥陀如来像の尊名は、本像が左手を後補し右手も指先を直しているために印相を前提とはできない一方で、左脚を外に結跏趺坐することから、この時期に多く造られた奈良時代以来の足組を踏襲する薬師如来像とみることができ。そして、伝観音菩薩像は、薬師如来像と一組の像だったと仮定すれば、その脇侍の日光、または月光菩薩だった可能性が生まれよう。さらに、伝虚空蔵菩薩像は、当初から袈裟を着した天部形だったと見なされるため、これも奈良時代以来

の形式を踏襲する梵天または帝釈天だった可能性が高い。

妙法寺には、本三尊像の他にやはり平安時代も早い時期(十世紀と考えられる)に遡る四天王像四軀が随侍している(図5～8)。時間の都合で四天王像の概要については省略するが(註2)、この四天王像を含めると、妙法寺現存像の当初の構成は、少なくとも薬師三尊像、梵天・帝釈天像、四天王像の計九軀によるものだったことが想定できる。この構成は、次に述べるように、奈良時代以来の官寺に備えられた尊種を完備するものであることが特に注目される。

Ⅲ. 妙法寺諸像と新治郡寺

妙法寺の草創は、寺伝によって延暦年間(782～806)に下野大慈寺の広智(註3)が創建し、天安年間(857～59)にはその弟子円仁が堂宇を改修したと伝えられるように天台宗との関わりが強調される。

妙法寺は、元龜年間(1570～73)に現在地桜川市本郷に移ったと伝えるが、その原所在地は現在地より南方 750 メートルほどの地点である(註4)。ここで注目したいのは、その原所在地から西南西わずか 800 メートルの地にその寺址を残す新治廃寺である。

新治廃寺は昭和 14 年、高井悌三郎氏の発掘調査によって中門・金堂・講堂を南北に並べ、金堂の東西に塔を配置する奈良時代の特異な遺構であることがあきらかになった(註5)。そして、出土瓦が奈良時代末を下らないことから、この寺は、弘仁八年(817)十月の新治郡衙の火災(註6)に類焼し焼亡したと考えられている。

新治廃寺がその地に再建されなかったことは考古学の知見が示すところである。一方、妙法寺に九世紀から十世紀にかけての群像が伝わる事実は、この寺の前身寺院がこの規模の造像を担いうる基盤を有していたことを示している。そしてこの群像の構成は、当時の公的な寺院が備える尊種をほぼ完備するものと見ることができる。

諸像のうち、坐形の薬師如来像は、平城京薬師寺金堂、新薬師寺などの奈良時代官寺の例をはじめ、平安京東寺金堂、丹波国分寺、佐渡国分寺など平安時代以降の官寺・国分寺に伝わる事例がある。奈良時代後半以降、国分寺及び官寺では滅罪を企図し薬師悔過をしばしば勤修するようになるが、これらの薬師如来像はその本尊だったとみなされる。また、梵天・帝釈天は、東大寺法華堂、法隆寺食堂、唐招提寺金堂の現存例のように、四天王像と一具として造像された。奈良時代の四天王像は六斎日の持戒・三宝への帰依・父母への孝順・不殺生などを観察し、違反者を懲罰する働きを持ち、また梵天・帝釈天はそれを統括する役割を担っていたと考えられる。ここから、薬師如来、並びに梵天・帝釈天・四天王像はすべて、滅罪ならびに持戒のために働く尊種と位置づけられる。

国分寺は、建立の詔にあきらかなように、僧尼が毎月半ばに誦戒羯磨し、俗人は六斎日に不得漁獵殺生を維持する場であった。これらの尊像は、そのような国分寺に期待された機能に正しく応える像であったと見なすことができるのである。

以上から、妙法寺に伝来する諸像は、中央の制度に倣った公的な機能を有する寺院にこそ帰属するにふさわしい。ここから、妙法寺前身寺院を新治廃寺廃絶後の郡寺的機能を担った寺として想定したい。

妙法寺は、新治郡において国分寺と機能的に類似する、中央に倣った平地寺院がこの時期存在したことを推定させるのである。

Ⅳ. おわりに

以上のとおり、妙法寺に伝来する平安時代九～十世紀の仏像を素材に、古代新治郡の宗教的環境を復元的に考えてみた。仏像は、文字資料、考古資料とはまた別な角度から歴史像を復原する重要な手段となると信じている。

翻って台渡里廃寺跡においても、観音堂山地区に創建された初期寺院は九世紀後半に焼失、南方地区に新たに寺院が再建されたが、諸事情により造営を途中で止めたと理解されている(註7)。造営が途中で止められた理由はともかく、郡寺の機能を担った寺院と見られる妙法寺の存在から、台渡里廃寺の二つの寺院について、その性格を解明する手がかりを提供できると考えるものである。

註

- (1) 妙法寺諸像は、茨城県教育委員会における平成 16 年度未指定文化財調査においてその重要性が認知された。その後、科学研究費基盤研究(A)「奥州仏教文化圏に遺る宗教彫像の基礎的調査研究」(研究代表者 有賀祥隆)の一環として、平成 17 年 2 月 11・12 日に調査を行った。この報告も調査時の合同調書にもとづくものである。
- (2) 四天王像の概要については、別に刊行の調査報告書に譲る。科学研究費基盤研究(A)「奥州仏教文化圏に遺る宗教彫像の基礎的調査研究」報告書、平成 18 年 3 月刊行予定。
- (3) 下野小野山寺、のち大慈寺の僧。はじめ鑑真の弟子道忠に師事、ついで最澄の弟子となり、のち下野国鎮国師となる。妙法寺のほか、東城寺を創めた最仙から寺を譲られるなど、常陸においても初期天台の有力僧の一人であった。
- (4) 桜川市上野原にあり、地元の研究者であった藤田 清氏は、妙法寺は新治廃寺の後身であるとの巷説もあり、址から古瓦が出土するといわれている。藤田 清・中村盛吉『常総古文化研究』昭和 47 年、藤田安通志編・刊。
- (5) 高井悌三郎『常陸国新治郡上代遺跡の研究』昭和 19 年、桑名文星堂。
- (6) 「日本後紀」弘仁八年冬十月癸亥条 『日本略記』前篇十四。
- (7) 川口武彦「常陸国那賀郡における郡衙と周辺寺院―国指定史跡「台渡里廃寺跡」範囲確認調査成果を中心に―」(奈良文化財研究所編・刊)『地方官衙と寺院―郡衙周辺寺院を中心として―』所収、2005 年。

(茨城県文化財保護審議会委員)



图1 伝阿弥陀如来像



图2 同 背面



图3 右脇侍像



图4 左脇侍像



図5 四天王像 持国天像



図6 四天王像 増長天像



図7 四天王像 広目天像



図8 四天王像 多聞天像

台渡里廃寺跡関連文献(年代順)

- 中山 信名 1902 『新編常陸國誌』
- 東 白蘋 1909 『常総の戦蹟』 水陽館
- 高井 悌三郎 1939 「王朝時代における地方統治と地方文化」『総合郷土研究』上巻 茨城縣
- 大森 信英 1951 「茨城県東茨城郡山根村の窯跡群について」『上代文化』20 國學院大學考古学会
- 飯田 瑞穂 1952 「那珂郡家について」『史窓』5 水戸一高史学会
- 考古學會 1952 「墨書・篋書・刻印土器出土地名表」『考古学』第1巻第4號
- 伊東 重敏 1953a 「曝井は何処か?那珂郡衙と河内駅家考察(田谷廃寺址予報)」『ヒタチジ』9 常北考古学研究所
- 伊東 重敏 1953b 「曝井は何処か?那珂郡衙と河内駅家考察批判」『ヒタチジ』10 常北考古学研究所
- 伊東 重敏 1954 「那珂郡衙及び河内駅家考察の反省(1)」『ヒタチジ』11 常北古代研究会
- 藤田 清 1956 『常総古代文化第14號 古代瓦拓影特輯號』常総古代文化研究会
- 佐藤 次男 1956 「常陸風土記に於ける河内駅家・那賀郡家・曝井所在地論批判」『考古学』18
- 佐藤 次男 1957 『墨書・篋書・刻印土器出土地名表』茨城考古学会
- 高井 悌三郎 1959 「常陸台渡里廃寺出土の文字瓦」『史迹と美術』29-8 史迹と美術同攷會
- 大森 信英 1959 「古代地方都市の形成」『茨城考古学』2 茨城考古学会
- 豊崎 卓 1959 「常陸国那珂郡家の総合考察—古代の水戸—」『茨城大学文理学部紀要(人文科学)』10 茨城大学文理学部
- 大森 信英・大川 清 1962 『水戸市木葉下窯跡群三ヶ野第2号窯址発掘結果報告書』水戸市史編さん室
- 高井 悌三郎 1962 「台渡廃寺址」『日本考古学辞典』東京堂出版
- 飯田 瑞穂 1963a 「第四章 律令制下の水戸地方」『水戸市史』上巻 水戸市史編さん委員会
- 飯田 瑞穂 1963b 「渡里付近の奈良時代の遺跡」『水戸市史』上巻 水戸市史編さん委員会
- 高井 悌三郎 1964a 『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』綜藝舎
- 高井 悌三郎 1964b 『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』茨城県教育委員会
- 高井 悌三郎 1966 「常陸地方の古瓦についての覚書」『日本歴史考古学論叢』
- 佐藤 次男 1967 「水戸市台渡里廃寺址の土師器」『茨城県の土師器集成』第1集 茨城考古学会
- 住田 正一・内藤 政恒 1968 『古瓦』学生社
- 大森 信英 1968 「奈良時代中葉より平安時代初頭における郡衛ないしは郡寺を中心とした市域の形成について」『茨城史学』3 県立高校教育研究会歴史部
- 伊東 重敏 1971 「仏教文化時代 寺院跡」『水戸市埋蔵文化財基本調査報告書(応急版)』水戸市文化財調査報告第1集 水戸市教育委員会
- 伊東 重敏 1972 「奈良時代の水戸—台渡廃寺跡の瓦—」『水戸の文化財拾遺』No.1 水戸市教育委員会社会教育課

- 伊東 重敏 1973 『常陸考古学研究所学報第15集 Site No.4761&4791 水戸地方における古代窯業の研究(その1 一序論一) 水戸市木葉下町落合発見の遺構』常陸考古学研究所
- 森 郁夫 1973 「奈良時代の文字瓦」『日本史研究』136 日本史研究会
- 郡司 良一 1974 「水戸市田谷廃寺跡出土の鏡瓦」『考古学ジャーナル』No.99
- 森 郁夫 1975 「奈良時代における東国の寺院造営」『考古学雑誌』61-4 日本考古学会
- 伊東 重敏 1975a 「那珂郷 墨書土器」『ひだみち』3 常陸考古学研究所
- 伊東 重敏 1975b 『常陸考古学研究所学報第16集 Site No.6181 水戸地方における古代窯業の研究(その2) 水戸市田谷廃寺跡出土古瓦雑考』常陸考古学研究所
- 茨城大学考古学研究会 1976 『茨城大学周辺遺跡分布調査報告書Ⅱ—那珂川流域における遺跡分布—(土師器・須恵器・瓦編)』
- 郡司 良一 1976 「5.渡里地区 126.徳輪廃寺(台渡里)」『水戸市埋蔵文化財(分布調査報告書)』水戸市教育委員会
- 伊東 重敏 1976 「阿波郷銘文字瓦」『ひだみち』No.4 常陸考古学研究所
- 伊東 重敏 1977 「台渡出土瓦二題」『ひだみち』No.5 常陸考古学研究所
- 阿久津 久 1977 『特別展 茨城の古瓦』茨城県立歴史館
- 高井 悌三郎 1978 「茨城の古瓦について」『茨城県立歴史館報』5 茨城県立歴史館
- 茨城県教育委員会 1979 「台渡里廃寺跡」『国・県指定史跡調査報告書』
- 桜井 康夫・杉山 惣一 1980 「Ⅲ. 遺跡各説 13. 台渡里廃寺跡 Site.No.5181」『さらしい 第Ⅲ・Ⅳ合併号』茨城大学考古学研究会
- 杉山 惣一 1980 「Ⅳ. 総括 3. 歴史時代 (3)瓦」『さらしい 第Ⅲ・Ⅳ合併号』茨城大学考古学研究会
- 川崎 純徳・鴨志田 篤二 1980 『原の寺瓦窯跡群発掘調査報告書』茨城県勝田市教育委員会
- 川崎 純徳・鴨志田 篤二 1981 『原の寺瓦窯跡群発掘調査報告書』茨城県勝田市教育委員会
- 阿久津 久 1981 「台渡里廃寺跡」『茨城県大百科事典』茨城新聞社
- 黒澤 彰哉 1981a 「古瓦」『茨城県大百科事典』茨城新聞社
- 黒澤 彰哉 1981b 「寺院跡」『茨城県大百科事典』茨城新聞社
- 阿久津 久 1982 「茨城県古代廃寺跡発掘の現状」『歴史手帖』10-10 名著出版
- 金井塚 良一・吉川 國男・昼間 孝次 1982 『特別展 古代東国の甍—仏教文化の夜明けを探る—』埼玉県立博物館
- 茨城県立歴史館 1982 『特別展 茨城の書跡—文字から見た地方文化—』
- 小倉 京子・加藤 恵子・稲子谷 知子・黒沢 久子・馬場 裕子 1982 「Ⅲ. 遺跡各説 8. 台渡里廃寺跡 観音堂山地区 Site No.126」『さらしい 第Ⅴ号』茨城大学考古学研究会
- 横倉 要次 1982 「Ⅳ. 総括 3. 歴史時代 一瓦について—」『さらしい 第Ⅴ号』茨城大学考古学研究会
- 志田 諄一 1982 「常陸国郡寺」『季刊 明日香風』20巻 飛鳥保存財団
- 加藤 雅美・根本 康弘 1982 「シンポジウム 古代の常陸 木葉下遺跡」『第5回茨城県考古学研究発

表会要旨』茨城県考古学協会

- 根本 康弘 1983 『茨城県教育財団調査報告第21集 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書
6 木葉下遺跡Ⅰ(窯跡)』財団法人 茨城県教育財団
- 財団法人茨城県教育財団 1984 「木葉下遺跡」『年報』3
- 郡司 良一 1984 「126 台渡里廃寺跡」『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和58年度版』水戸市
教育委員会
- 小河 邦男・川井 正一 1984a 『茨城県教育財団調査報告第26集 常磐自動車道関係埋蔵文化財発
掘調査報告書8 木葉下遺跡Ⅱ(窯跡)』財団法人 茨城県教育財団
- 小河 邦男・川井 正一 1984b 「木葉下遺跡E地点の13, 14, 15, 16号窯跡について」『年報』3 財団
法人 茨城県教育財団
- 川井 正一 1984a 「木葉下遺跡(水戸市)」『第6回茨城県考古学研級発表会要旨』茨城県考古学協会
- 川井 正一 1984b 「水戸市木葉下窯跡群出土の須恵器」『菟玖波』創刊号 菟玖波の会
- 小河 邦男 1985 「木葉下遺跡須恵器窯の操業回数と操業期間について」『年報』4 財団法人 茨城県
教育財団
- 高井 悌三郎 1985a 「第5章 第3節 人々の生活」『茨城県史 原始古代編』茨城県
- 高井 悌三郎 1985b 「第5章 第4節 生産体制の確立」『茨城県史 原始古代編』茨城県
- 高井 悌三郎 1985c 「第5章 第5節 奈良仏教の開花 那珂郡の寺院—台渡里廃寺跡・薬師平遺跡」
『茨城県史 原始古代編』茨城県
- 茨城県立歴史館 1985 『茨城県関係古代金石文資料集成—墨書・銘書—』
- 茨城県立歴史館 1986 「木葉下窯跡群」『特別陳列 茨城の須恵器窯跡—窯跡にみる古代土器の生産
と供給—』
- 森 郁夫 1986 「IV.瓦の生産 3.文字瓦」『考古学ライブラリー43 瓦』ニュー・サイエンス社
- 常磐女子高等学校社会科学研究部 1986 「台渡里廃寺の鏡瓦」『社会科学研究部報』2
- 久信田 喜一 1987 「古代常陸国那賀郡の郷について」『茨城史林』第11号
- 齋藤 忠 1987 「墨書土器研究の意義」『季刊 考古学』18号 雄山閣
- 大川 清 1987 「文字瓦研究の方法」『季刊 考古学』18号 雄山閣
- 市毛 美津子 1987 『特別陳列 古代の寺「台渡里廃寺跡」』水戸市立博物館
- 青木 豊・内川 隆志 1987 「茨城県 台渡里廃寺 茨城県水戸市渡里町」『國學院大學考古學資料
館要覧 1987 古瓦』國學院大學考古學資料館
- 辻 秀人 1988 「2.東国の飛鳥、白鳳時代の瓦と寺院」『企画展 陸奥の古瓦』福島県立博物館
- 川井 正一 1988a 「台渡里廃寺出土の墨書土器」『菟玖波』2 菟玖波倶楽部
- 川井 正一 1988b 「外面に同心円文叩き目を有する須恵器について」『婆良岐考古』10 婆良岐考古
同人会
- 黒澤 彰哉 1988 「常陸における古代寺院の一考察—各郡の造瓦活動を中心として—」『婆良岐考古』
10 婆良岐考古同人会

- 瓦吹 堅 1988a 「常陸の古印」『婆良岐考古』10 婆良岐考古同人会
- 瓦吹 堅 1988b 「水戸市台渡里廃寺覚書Ⅰ—仏像範型を中心として—」『Shell Mound』3 東日本考古学同人会
- 森 郁夫 1988 『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 市毛 美津子 1989 「特別陳列 古代の寺『台渡里廃寺跡』」『水戸市立博物館報』4 水戸市立博物館
- 瓦吹 堅 1989 「水戸市台渡里廃寺覚書Ⅱ—第2号住居跡を中心として—」『史峰』14 新進考古学同人会
- 廣田 長三郎 1989 『古瓦図考』ネルヴァ書房
- 三舟 隆之 1989 「国分寺造営と地方豪族—国分寺系軒瓦の分布を中心として—」『駿台史学』75 号 駿台史学会
- 井上 義安 1990 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う埋蔵文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡調査会
- 森 郁夫 1990 『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 大脇 潔 1991 「畿内と東国の初期寺院」『第5回企画展 東国の初期寺院—古墳時代から律令時代への動き—』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 瓦吹 堅 1991a 「水戸市台渡里廃寺覚書Ⅲ—観音堂山・南方・長者山地区の性格について—」『婆良岐考古』13 婆良岐考古同人会
- 瓦吹 堅 1991b 「水戸市台渡里廃寺関係文字瓦覚書—『徳輪寺』銘を中心として—」『史碧』創刊号 新進考古学同人会
- 小森 紀男・松岡 貴直 1991 「Ⅱ 東国の初期寺院 1 茨城県(常陸、一部下総の遺跡) (4) 台渡里廃寺跡 No.15」『第5回企画展 東国の初期寺院—古墳時代から律令時代への動き—』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 川井 正一 1992 「内原町蔵田千軒遺跡出土の陶硯について—茨城県内出土陶硯集成—」『内原町史研究』創刊号 内原町史編さん委員会
- 井上 義安編 1992 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 外山 泰久 1993 「アラヤ前遺構(水戸市渡里町)をめぐって」『常総の歴史』13 崙書房
- 山中 敏史 1994 「第二節 評衙・郡衙成立の歴史的意義」『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 茨城県立歴史館学芸部 1994a 「台渡里廃寺」『学術調査報告書 4 茨城県における古代瓦の研究』
- 茨城県立歴史館学芸部 1994b 「木葉下窯跡」『学術調査報告書 4 茨城県における古代瓦の研究』
- 茨城県立歴史館学芸部 1994c 「下入野遺跡」『学術調査報告書 4 茨城県における古代瓦の研究』
- 茨城県立歴史館学芸部 1994d 「長福寺遺跡, 北屋敷遺跡」『学術調査報告書 4 茨城県における古代瓦の研究』
- 黒澤 彰哉 1994 『特別展 東国の古代仏教—寺と仏の世界—』茨城県立歴史館

- 井上 義安・千葉 隆司 1995 『水戸市台渡里廃寺跡 都市計画道路 3・6・30 号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会
- 佐々木 義則 1995 「木葉下窯跡群産坏 A I の変化について—消費地における形態と調整技法の様相—」『婆良岐考古』17 婆良考古同人会
- 土生 朗治 1995 「山田窯跡表採遺物について」『研究ノート』5 財団法人 茨城県教育財団
- 斎藤 忠 1995 「I 解説 4 寺院跡について (1) 初期寺院と郡寺」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 川井 正一 1995a 「I 解説 5 生産遺跡について」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 黒澤 彰哉 1995 「I 解説 6 古瓦について」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 高井 悌三郎 1995 「I 解説 (ロ) 寺院跡 6 台渡里廃寺跡」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 川井 正一 1995b 「I 解説 (二) 生産遺跡 78 木葉下窯跡群」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 鴨志田 篤二 1995a 「I 解説 (二) 生産遺跡 81 原の寺瓦窯跡」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 鴨志田 篤二 1995b 「茨城県 台渡廃寺跡」『日本古代遺跡事典』吉川弘文館
- 田熊 信之他編 1995 『古瓦集成—宇野信四郎蒐集—』東京堂出版
- 久信田 喜一 1995 「第三章 第一節 律令制の成立と茨城町地方」『茨城町史』通史編
- 岡本 東三 1996 「三 山田寺式軒瓦と東国の寺院」『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館
- 井上 義安・栗原 芳子 1996 『水戸市台渡里遺跡 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・空間計画工房
- 水戸市教育委員会 1996 『水戸の指定文化財』
- 大川 清 1996 『古代のかわら』窯業史博物館
- 国立歴史民俗博物館 1996 『日本古代印集成「非文献資料の基礎的研究—古印—」報告書』
- 市毛 美津子 1996 「遠台遺跡採集の瓦塔について」『内原町史研究』5 内原町史編さん委員会
- 土生 朗治 1996 「山田窯跡表採遺物について」『研究ノート』5 号 財団法人 茨城県教育財団
- 茨城県教育委員会 1997 「台渡里廃寺跡」『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書IX(平成6・7年度)』
- 黒澤 彰哉 1997 「常陸国の初期寺院」『関東古瓦研究会第2回シンポジウム 関東の初期寺院資料編』関東古瓦研究会
- 大関 武 1997 「茨城県の古代寺院」第42回埋蔵文化財研究集会 古代寺院の出現とその背景 第1分冊 発表要旨・資料(東日本編)『香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会』
- 佐々木 義則 1997 「木葉下窯跡群の須恵器生産—奈良時代前半を中心に—」『婆良岐考古』19 婆良岐考古同人会
- 長谷川 武 1997 「国府と河内駅家間の古代官道について」『内原町史研究』6 内原町史編さん委員会
- 平川 南・永嶋 正春他 1997 『「非文献資料の基礎的研究—古印—」報告書 日本古代印集成』国

立歴史民俗博物館

- 平賀 康意 1998 『【特別展】常陸国風土記の世界—ひたみちの首長と民—』茨城県立歴史館
- 常陸古代窯業史研究会 1998 「水戸市山田窯跡群確認調査報告」『茨城県考古学協会誌』10 茨城県考古学協会
- 黒澤 彰哉 1998 「常陸国那賀郡における寺と官衙について」『茨城県立歴史館報』25 茨城県立歴史館
- 川崎 純徳・鴨志田 篤二・神山 陽子 1998 『原の寺瓦窯跡発掘調査報告書(第四次)—1995 年度原の寺瓦窯跡発掘調査の成果—』茨城県ひたちなか市教育委員会・茨城県ひたちなか市埋蔵文化財調査センター・ひたちなか市遺跡調査会
- 平川 南・永嶋 正春他 1999 『国立歴史民俗博物館研究報告第 79 集 日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館
- 井上 義安・蓼沼 香未由・仁平 妙子・根本 睦子 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成 10 年度版』水戸市教育委員会
- 茨城県教育委員会 1999 「台渡里廃寺跡」『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書 X (平成 8・9 年度)』
- 大橋 泰夫 1999 「古代における瓦倉について」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 黒澤 彰哉 1999 「新治廃寺の成立と画期—新治廃寺跡出土瓦の分析を中心にして—」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 池田 敏広 1999 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討—関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に—」『研究紀要』第 7 号 財団法人 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 三舟 隆之 1999 「地方寺院造営の背景—七世紀後半の東国を中心として—」『史学雑誌』108 編 10 号 史学会
- 赤井 博之 2000 「茨城県」『古代仏教系遺物集成・関東—考古学の新たな開拓をめざして』考古学から古代を考える会
- 千葉 隆司 2000 「Ⅲ 国府の影響を受けた瓦・台渡里廃寺」『第 22 回特別展 古代の瓦 常陸国府の瓦づくり』霞ヶ浦町郷土資料館
- 黒澤 彰哉 2000a 「瓦にみる常陸国分寺の造営」『第 22 回特別展 古代の瓦 常陸国府の瓦づくり』霞ヶ浦町郷土資料館
- 黒澤 彰哉 2000b 「常陸台渡廃寺と那賀郡衙」『文字瓦と考古学』国士舘大学実行委員会
- 黒澤 彰哉 2000c 「(46) 常陸台渡廃寺と那賀郡衙」『日本考古学協会第 66 回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 黒澤 彰哉 2001a 「瓦窯を歩く 瓦礫雑感」『ぶんかざいほごねんぼう 2000 フィールドノート Vol.13』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 黒澤 彰哉 2001b 「V 考察 2.常陸国衙跡出土屋瓦の検討」『常陸国衙跡—石岡小学校温水プール

建設事業に伴う調査—石岡市教育委員会

- 長谷川 武 2001 「常陸国における古代駅制の研究 とくに国府・安侯・河内駅家間の直線道について」『郷土文化』42 茨城県郷土文化研究会
- 森 郁夫 2001 「第三章 文字や絵のある瓦」『ものと人間の文化史 100 瓦』法政大学出版局
- 大川 清 2002 「三 地方寺院・官衙の造瓦組織 (三) 常陸台渡廃寺」『古代造瓦組織の研究』日本窯業史研究所
- 栗原 淳 2002 『第 44 回企画展 乙女の古代瓦と下野国』小山市立博物館
- 上原 真人 2002 「奈良時代の文字瓦」『行基の考古学』摂河泉古代寺院研究会編 塙書房
- 黒澤 彰哉 2002 「第 1 章第 5 節 常陸国の成立 三 仏教の奨励と統制 台渡廃寺の文字瓦」『岩間町史』岩間町
- 稲田 義弘 2002 「金付着土器について」『研究ノート』11 号 財団法人 茨城県教育財団
- 水戸市教育委員会 2002 『台渡里廃寺跡範囲確認調査現地説明会資料』
- 川口 武彦・蓼沼 香未由 2002 「台渡里廃寺跡」『第 24 回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 川口 武彦 2003a 「台渡里廃寺跡観音堂山地区採集の古瓦—凸面に櫛描波状文を有する平瓦—」『考古学ジャーナル』No.497 ニューサイエンス社
- 川口 武彦 2003b 「台渡里廃寺跡観音堂山地区出土の古瓦と土器—小園江 好氏所蔵資料の紹介—」『婆良岐考古』25 号 婆良岐考古同人会
- 川口 武彦 2003c 「茨城県指定史跡 台渡里廃寺跡観音堂山地区」『設立 25 周年記念講演会資料・第 25 回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 川口 武彦・渥美 賢吾 2003 「木葉下窯跡群における窯業生産の展開(1)—一堂の内茅場・細入両窯跡を中心に—」『茨城県考古学協会誌』15 号 茨城県考古学協会
- 志賀 崇 2003 「Ⅲ 官衙建物の遺構 Ⅲ-9 瓦葺建物の比率と時期」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 鴨志田 篤二 2003 「茨城県原の寺瓦窯跡とその周辺」『新世紀の考古学—大塚初重先生喜寿記念論文集—』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
- 水戸市教育委員会 2003 『茨城県指定史跡台渡里廃寺跡観音堂山地区—平成 15 年度範囲確認調査現地説明会資料—』
- 黒澤 彰哉 2003 『よみがえる古代の茨城』茨城県立歴史館
- 三舟 隆之 2003 『日本古代地方寺院の成立』吉川弘文館
- 浜田 晋介・望月 一樹・吉野 真由美 2003 「3. 郡の名がついた寺院 台渡里廃寺跡」『古代を考える I 郡の役所と寺院』川崎市市民ミュージアム
- 川口 武彦 2004 「茨城県水戸市山田窯跡群出土の大形瓦製品」『筑波大学先史学・考古学研究』15 号 筑波大学歴史・人類学系
- 佐々木 義則 2004 「寺院と役所の造営」『図説 水戸・笠間の歴史』郷土出版社

- 川崎 純徳・岡本 東三・黒澤 彰哉・後藤 道雄・小松崎 博一・川口 武彦 2004 「茨城県指定史跡台渡里廃寺跡観音堂山地区の調査と課題」『日本考古学協会第70回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 蓼沼 香未由・川口 武彦・池田 敏宏・瓦吹 堅・黒澤 彰哉・渥美 賢吾 2004 『台渡里廃寺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』水戸市教育委員会
- 川口 武彦・渥美 賢吾 2004 「木葉下窯跡群における窯業生産の展開(2)—細田・打越・四又入窯跡群を中心として—」『茨城県考古学協会誌』16号 茨城県考古学協会
- 川口 武彦・小松崎 博一 2004 「茨城県指定史跡 台渡里廃寺跡観音堂山地区」『第26回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 水戸市教育委員会 2004 『茨城県指定史跡台渡里廃寺跡—平成16年度範囲確認調査現地説明会資料—』
- 稲田 健一 2004 「常陸国の7世紀—古墳を中心に—」『第5回大学合同考古学シンポジウム 古墳から寺院へ—関東の7世紀を考える— 予稿集』大学合同考古学シンポジウム実行委員会
- 山中 敏史 2004 「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心に— 研究報告資料』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究
- 川口 武彦 2004 「常陸国那賀郡における郡衙と周辺寺院—茨城県指定史跡「台渡里廃寺跡」範囲確認調査成果を中心に—」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心に— 研究報告資料』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究
- 川口 武彦 2005 「瓦のふるさとを求めて—木葉下窯跡群を歩く—」『ぶんかざいほごねんぼう 2004 フィールドノート Vol.17』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 小松崎 博一 2005 「台渡里廃寺整理日誌」『ぶんかざいほごねんぼう 2004 フィールドノート Vol.17』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 須田 勉 2005 「多賀城様式の瓦の成立とその意義」『国士舘大学文学部人文学会紀要』第37号 国士舘大学文学部
- 須田 勉 2005 「多賀城様式瓦の故地」『古代東国の考古学—大金宜亮氏追悼論文集—』慶友社
- 川口 武彦・小松崎 博一・新垣 清貴編 2005 『台渡里廃寺跡 範囲確認調査報告書』水戸市教育委員会
- 土生 朗治・川口 武彦・新垣 清貴 2005 『台渡里廃寺跡 —市道常磐17号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—』水戸市教育委員会
- 川崎 純徳・岡本 東三・黒澤彰哉・後藤 道雄・小松崎 博一・川口 武彦・新垣 清貴 2005 「(35)茨城県指定史跡台渡里廃寺跡の調査と課題」『日本考古学協会第71回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 大津 郁子 2005 「台渡里廃寺跡出土の遺物について—水戸市立博物館寄託資料の紹介—」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会

- 文化庁文化財部 2005 「新指定の文化財(無形文化財・記念物) 台渡里廃寺跡」『月刊文化財 9/平成 17 年』第 504 号 第一法規株式会社
- 川口 武彦・新垣 清貴 2005 「茨城県指定史跡 台渡里廃寺跡」『第 27 回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 川口 武彦 2005a 『台渡里廃寺跡の文字瓦—辰馬考古資料館所蔵資料調査中間報告—』(明治大学古代学研究所研究会当日配布資料)
- 川口 武彦 2005b 「常陸国那賀郡における郡衙と周辺寺院—国指定史跡「台渡里寺跡」範囲確認調査成果を中心に—」『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 山中 敏史 2005 「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題—氏寺論の再検討—」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 志賀 崇 2005 「『郡衙周辺寺院』の性格—考古資料を用いた分析への展望—」古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2005 『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』
- 川口 武彦 2006a 「古代常陸国の郡衙周辺寺院出土陶製相輪考—つくば市北条中台遺跡出土有孔浅鉢形須恵器の再評価—」『茨城県史研究』第 90 号 茨城県立歴史館
- 川口 武彦 2006b 「台渡里廃寺跡の文字瓦—辰馬考古資料館所蔵資料調査中間報告(1)—」『明治大学古代学研究所紀要』1 号 明治大学古代学研究所
- 川口 武彦 2006c 「常陸国の郡衙周辺寺院における礎石建物の調査手法と課題—国指定史跡「台渡里廃寺跡」の調査を中心に—」『帝京大学山梨文化財研究所古代考古学フォーラム 2006 掘立柱・礎石建物建築の考古学—官衙・集落・寺院におけるその分析と研究法—』
- 菱田 哲郎 2006 「古代日本における仏教の普及—仏法僧の交易をめぐる—」『考古学研究』52-3 考古学研究会
- 山中 敏史 2006 「郡衙および官衙関連遺跡をめぐる諸問題」『静岡県考古学会 2005(平成 17)年度シンポジウム 古代の役所と寺院—郡衙とその周辺—』静岡県考古学会
- 小川 和博・大淵 淳志・松谷 暁子・川口 武彦 2006 『台渡里遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』水戸市教育委員会
- 大橋 生・佐々木 藤雄・川口 武彦・林 邦雄・渥美 賢吾 2006 『台渡里廃寺跡 —市道常磐 17 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—』水戸市教育委員会

(川口武彦作成)

国指定記念シンポジウム

台渡里廃寺跡を考える

資料集

印刷	平成18年3月20日
発行	平成18年3月24日
編集・発行	水戸市教育委員会
	水戸市中央1-4-1
	TEL 029-224-1111 (内線542)